惟治の魔法と富尾神社

佐藤　巧

先生は古くから佐伯史談会(羽柴弘幹事)と親交があり、昭和四一年度の佐伯史談二一号に先生の書簡「トビの尾社とナガラ神社」が紹介されています。これらの研究は昭和四五年の著書「卑弥呼」に論述され、昭和六二年の著書『豊後の歴史を彩る英雄たち』には第五章に羽柴氏の追悼文として「大神氏の祖惟基を〝あかがりの大弥太〟ということ」を論述しています。

先生の著書は我々に大きな感動を与えました。古代の歴史が地名や民俗・信仰・伝承の中から如実に描き出されていたからです。とりわけ海部や佐伯地方の話題となると、辺境の地とばかりに思っていた郷土の歴史が一躍脚光を浴び輝いて見えました。

先生と私の交信がはじまったのは昭和六二年から、「佐伯地方の鉱山と地名」について質問を受けたのが最初でした。当時私は「栂牟礼実録」に熱中し、佐伯惟治の魔法が鍛治精錬にあると模索していたので、知り得る限り情報をまとめて返信したところ、大層お褒めくださり、以後何かにつけてご指導いただきました。

十年余の間に受け取った書簡を振り返ると、私が持論と称しているものの多くが、先生との交信の中で培われ、先生の論証を自らの足で実証できたことが今も私の血肉となっているようです。そして積み残された課題があったことを思い起こし、いつの日か先生の霊前に捧げる日が来ることを念じています。

『どんな実験も、失敗ということはありません。つみ重ね、「クリ返シ」は、みなプラス、説得の材料です』。平成二年、我々がリーフデ号漂流実験を実施したときにいただいた激励の葉書です。まさに先生の生き方、研究の姿勢を教えられた思いがします。